

心理講座より

「心理学講座」第1回配本附録

東京都神田局區内神保町2の24

電車通り

株式會社中山書店

偶一感編

相良守次

近ごろ、科学研究と戦争との問題が科学者、ことに自然学者の間で論議されている。戦争の道具になるような研究は差し控えるべきだという主張をめぐつての論で、具体的には原子力研究の可否ということから起つた問題である。

平和を希う人士としてこの主張は理の当然といえども、しかし右の主張もすこし観点をひろげてみると、いろいろ論議の余地を生じてくる。ノーベルのダイナマイト以来なにが戦争の道具にされるかは研究者の意図に反して利用される場合もあるし、また基礎的な研究になるとどんな研究が将来戦力になるかを判定しがたいことも多かる。ことに現在の戦争のように全国力を集中するような恰好になると、戦争の道具になる研究といふものの範囲が曖昧なことにもなる。そこである論者は、人を切れるような刃物でなければ他の物だつてよく切れはしない、といふ論をもちだして、戦争に利用すれば役につくような研究でなければ確な研究ではあるまい、と神経質な戦争道具研究論をきめつける。これはもちろんやゆ論であるが、それにも一

理あることはいうまでもあるまい。実際に、戦力として利用すれば卓效のあるような研究なら、平和生活のためにもおおいに利益をもたらすような使い方があるという場合がむしろ一般かも知れないし、少くとも当面の原子力研究などはその顕著な一例かもしれない。

そうすると、すぐれた科学研究を戦争の武器にするも平和生活の道具にするも、それを使う人の心構えにかかるという至極常識的な見解におちつくのが、この点を眞面目に訴えたさる自然学者の言葉は、私にある感慨を催させた。この自然学者は、良心的な自然学者が意を安んじてその研究に没頭することができるよう、すなわち自然学者の業績を戦争に役立てようとすることのない世の中をつくつて欲しいこと、そしてそのためには人文科学を格段に進歩させることが必要であり、それによつてそのような世界が出現する可能性のあること、また、現在の状態は自然科学の進歩に比して人文科学があまりにもおくれていることを人文学者に訴えたものであつた。

この文を読んで私は、人文学者の端くれにあるものとして恥しいながら、自分の専門の学問の進歩が、右の期待に副うような効験をあげうるかについて確信をもつとは現在のところとてもいえない。しかしこの、自然科学と人文科学との進歩の跛行性といふものが人間生活の不幸の因になつてゐるといふことは、心ある科学者によつて以前から警告されていたのに、一般的には今なおそれほど重大に考えら

れていないという点については、遺憾の感
なきをえない。

二十年ちかくも以前に、アレキシス・カ
レルは「人間、この未知なるもの」にこの
ことを指摘している。そして今まで同じ言
葉を違った問題について自然科学发展者に警告
されているわけなのである。

戦争は人の心からおこる、とユネスコの
委員会が喝破して、その対策を人文科学者
にもとめている。しかし今の人文学者が
自信をもつてそれに応えることができるで
あろうか。そしてこのことは弁解ではなく、
人文科学者だけの怠慢ではないのである。

科学は決して甘いものではないのであって、
基礎的研究からがつちりと進めてゆくので
なければ実際問題を解く対策などが簡単に
立つものではない。われわれはこういう人
文科学の実状について世人の正しい理解を
求めるとともに、自然科学と人文科学との
歩行性から生れる欠陥を十分よく見究め、
その是正のための支援を乞いたいのである。

こうした意味からもわれわれの科学の最
近の研究状況をまとめて世に問う意識を私
は感じている。ことに、戦争を問にはさん
での最近十年の間に、心理学の内容は相当
な変貌を示したとおもう。大戦前には世界
心理学界の双壁であった独逸と米国、ある
いは形態派と行動派の対立から、戦争を契

機として米国の心理学を世界の主役にして
しまい、形態派も行動派とともに吸収され
てしまった。その結果戦前大きな影響力を
わが心理学界におよぼした独逸ははるかな
距離に遠去かつて、今はもっぱら太平洋の
彼岸の動向が敏感に波及してきている。

米国の心理学の動向といつても、とても
一言で言い切れるものではない。戦前はい
たってお粗末な道具立てとおもえた行動派の
理論は、今日どうしてどうして大変な脈や
かさで、鼠の研究からおいおい人間界に迫
らうとしている。また人間研究の方ではい
わゆる人格中心の見方がきめ手になつて、
心的諸過程を総合的に考察する段階に達し、
知覚も記憶もその基盤から省察され、社会
的知覚などという言葉が流行する。一方で
は生物学的觀點から身心全体をふくめた人
間を取扱う野望を示し、一部の知覚研究者
は感官生理学者の仕事を横領しようとした
りしている。また実用的方面になると、臨
床心理学者と登録する会員が全心理学会員
の四割にも達する。社会心理学者は人文科
学の花形気どりになつていて、

しかしそれは、昭和十六年末から十八年に
かけて、予定の十二巻の中九巻を刊行した
ままで中絶してしまつた。本講座は轟に毎
日出版文化賞を受賞した生理学講座発行所
中山書店の企画のもとに規模において前者
を凌ぐ総合的なものである。そして私は、
小保内君とともにその編輯につらなること
になつたが、この両者をくらべてみると、
十年の歳月による心理学界の変貌をまさ
ざと見るような感がある。これにも聊か感
慨を催す次第である。(東京大学教授文学
博士一一九五三・一・三〇)

毎日出版文化賞受賞

日本生理学会編

(内容見本進呈) 全十八巻完成

慶太教授医学博士

科

林

定価 七五〇円

譯著

(近刊)

定価約七〇〇円

生 理 学 概 論

定価 四五〇円

慶太教授医学博士

田坂定孝著

定価約七〇〇円

代

謝

的
進
適
土
風
依
田
新

毎年進学適性検査が全国一せいに行われることになると、進適是非の議論があちこちで聞かされる。今年は独立後最初の進適であつたせいか、進適不要論が新聞にでたり、公聽会まで開かれて、その是非の議論が相当やかましかつたようだ。考えてみると、進適もまさしく占領軍のおとし子の一つだつたのである。たしか昨年の四月頃だつたか、もう進適は行わないという風説がつたえられたこともあつた。

はたして進適は無意義なものなのであるうか、それともやはりなんらかの意味をもつものであろうか。新聞などでた進適必要論者の意見はかならずしも明確ではなく、やればやつただけの意味があるといふ程度をでていない。どうしても必要だといふキメテがない。良心的であろうとすればするほど、論旨があいまいになつてくるのである。これに対し不必要論は、頭から無意味だときめてかかれた偏見が多い。そして枝

葉末節をとりあげて、進適打倒の大見得を切つてゐる。しかも悪いことに、これは俗耳に入りやすく、ひとびとは次第に進適に対する信用を失いつつあるようである。ただ大学を受験しようとする学生だけが、是非の論を超えて黙々と進適の準備をし、これにつけこんで進適コンクールが金もうけをしているにすぎない。

こういう状態はけつして好ましいことではない。進適是非について科学的な判決が一日も早く下される必要がある。これは心理学者あるいは教育学者の責任である。昨年学術会議から出版された二十六年度の試験研究費による研究報告集の中に、一群の心理学者たちによる進適に関する研究が報告されている。これを見ると、是とも非ともきめられないが、読み方によつては無用論の資料にもなりそうである。勿論、進適の是非ということはそらかんたんにきめられるものではない。学力検査との関連だけで片づく問題ではなく、数年に亘るフォローアップが必要であろう。われわれもそう 性急に結論を要求せず、今日もなお続いているその研究の成果を待つことにしよう。そして心理学者としては、この国家的統整によつて行われる進適を、寧ろ貴重な資料として、それが行われる限り、それを無駄にしないような努力が要請される。

しかし、わたくしがいいたかったのは、そういうむずかしい議論ではなくて、進適というようなものが喜んで迎えられる風土のようなものがありやしないかということである。大学を受験しようとするものが全部同一の条件で、客観的にテストされ、機械にかけるとすぐにそれが数字になつてあらわれる、というようなことは、やはりアメリカ文化の産物である。長い間ヨーロッパ的文化に育てられた日本は、けつして進適に適した風土とはいえない。人間の能力をかんたんなテストで評価するというようなことに日本人は抵抗を感じるのである。人間の能力を数字で割り切つてしまつよりは、いくらかの神秘的なもの、非合理的なものをして、そこに残しておきたいと感ずるのである。だから進適反対論が世論に受け入れられやすいのであろう。

しおせん、日本の知的風土がこのままであれば進適は育たないかも知れない。併しそ最近の日本の知的風土はだいぶアメリカ化されてきている。それが望ましいか望ましくないかは別として、進適に適する風土に近い将来において變つてしまふかも知れない。確かに、進適への毒舌は、アメリカ化への抵抗であるとも見られるのである。まだ進適可否論が戦わされているうちが花であったときめてかかれた偏見が多い。そして枝

生物学

としての

心理学

一体學問体系を分類して「何々学」とす
る二き、「可々一」、う名前は普通歴史土

ヘルムホルツ・ゾントの時代、生理学は當時最新の実験方法、手段を供給して心理学の思惟的な論争を解決したものであった。それからもう四分の三世紀もたって生理学の実験方法、実験手段は異常な勢いで進歩し昔日の佛はない。もちろん、心理学においてもそれらの方法手段の進歩はいちじるしいものがあつたにはちがいないが、生物科学一般に比較すると、反省を要するものがあろう。

心理学講座

には現代生理学の技術の紹介がある。心理学の存在理由がある以上同じ技術を利用して対象、問題、結論は生理学と異なるはずである。もうこの辺で心理学も独自なものになつてよいではなかろうか。そして心理学は自然科学の中に位置することを——学術会議の中でも自然科学に属することを——堂々と主張しようではないか。アメリカの心理学がそうであるように。（東京大 学心理学教室）

がって心理学というとアリストテレス以来の伝統によつて哲学の一分科として一般に理解されてゐる。ところが、心理学の畑では、すでに半世紀以上も前から哲学の一分科という立場を排して「自然科学」の体系の中にその立場を築きあげようとする努力がなされてきた。しかもこの努力の原動力は大半生理学者、生物学者、物理学者のようないひとびとから供給されたのである。心理学はこの点からみると生物学とは親しい間柄なはずである。

現在、多くの心理学者は心理学を生物学の一分科と認めて研究活動に従事している。が、生物学者、とくに生理学者の側で、心理学を生物学の一分科として自己の傍においてくれる人がどれくらいあるだろうか。

間柄なはずである。

現在、多くの心理学者は心理学を生物学の一分科と認めて研究活動に従事しているが、生物学者、とくに生理学者の側で、心理学を生物学の一分科として自己の傍においてくれる人がどれくらいあるだろうか。

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|-----------|---------|-----|
| 性 | 格 | 診 | 斷 | 法 | (1) | 日本女子大教授 | 児玉 |
| 性 | 格 | 診 | 斷 | 法 | (2) | 早大教 授 | 本明 |
| 性 | 格 | の | 類 | 型 | 論 | 慈惠醫 學博士 | 高良 |
| 格 | の | 類 | 型 | 論 | 同大神經科教室 | 河村 | 武久 |
| 行 | 動 | の | 類 | 型 | 阪大教授醫學博士 | 吉井 | 高信 |
| 行 | 動 | の | 類 | 型 | 東北大教授醫學博士 | 直三郎 | 直三郎 |
| 職 | 業 | 指 | 導 | 波 | 醫學博 士 | 本川 | 寛 |
| 職 | 業 | 指 | 導 | R | 神戶大學 教授 | 藤森 | 兒玉 |
| 適 | 性 | 檢 | 查 | G | 日本大學助 教授 | 増田 | 弘 |
| 適 | 性 | 檢 | 查 | P | 勞動省職業調查課長 | 伊藤 | 一 |
| 特 | 殊 | 能 | 力 | . | 共立女子大教授 | 松玉 | 一一 |
| キ | ユ | ニ | ル | . | 東北大教授文學博士 | 岡本 | 時 |
| ソ | ー | ン | ダ | Y | 順天堂大學教授 | 祐洋 | 省 |
| フ | ロ | イ | イ | ク | 日本大學助教授 | 忍 | |
| ダ | ウ | ツ | ト | ヒ | 同 | 義 | |
| ム | ー | ム | ト | ム | 木村 | 禎 | |
| | | | | | 田 | 克 | |
| | | | | | | 朝 | |

で信くをそにこみがれもで所学つにを座一心：金推
あすれみしわれ内「心あ終会た期め」心理日森騰
るるたてかな答項一をのがかるの理學本徳
：かとしらるらを目つひこも私にと計学会応次
：ら確て乏「私みをだかとののな急画譲の用郎